
バカと速攻と昆虫少年

榊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと速攻と昆虫少年

【Nコード】

N1495BA

【作者名】

榊

【あらすじ】

文月学園二年Fクラス所属、七伏博人。昆虫をこよなく愛し、昆虫少年の異名を持つ彼。そんな彼の兄や幼なじみ、そして級友達を交え、我が道を走りながらも愉快に学園生活をおくっていく。そして最近はいろいろ逃げ道がない。そんな彼の召喚獣の戦い方、それは『速攻』。

「殺られる前に殺りつづけければ殲滅完了だ」

「はいはいチートチート」

駄文になりますが、お付き合いいただけると嬉しいです。偶数日の

定期更新です。

※間違えて削除してしまったため再投稿しました。

第一問

第一問

校舎へ続く道が桜に彩られる新学期。

僕は双子の兄である行平ゆきひらと幼なじみの佐藤楓さとうかへで、通称メーブルと共に坂道を登っていく。

ちなみに桜の品種のソメイヨシノは全てクローンなので、条件が揃えば同時期に咲く。そのため開花予想もできるのだ。

他愛もない雑談をしながら歩くと玄関の前に西村先生、通称鉄人が立っていた。

「「「おはようございます」」」

「ああ、お前たちか。これがクラス割だ」

そういつて渡されたのは茶色の封筒。

適当に開けると中にはFの文字、つまりこの学校の最低クラスが書いてあった。

「そっちはどうだった？」

二人に聞いてみると、Aクラスだとかえってきた。

「残念だがこれもルールだからな」

西村先生に声をかけられる。

うん、僕がFクラスなのは、ルールである以上仕方がない。

「うう：：ハクと一緒に良かったっす」

「っす」というのはメーブルの口調。

これはキャラ作りらしい。何でだろうね？

ちなみにハクというのは僕、博人のことだ。

「試召戦争、頑張って下さい」

デフォルトで丁寧なのは行平の口調だ。

紳士的な人間（腹黒）が行平の特徴といえよう。

そして二人と別れ、今Fクラスの前に立っている。

ドアを開けると、畳と卓袱台、座布団という斬新な設備の教室がひろがっていた。

ああ、今日もいい天気だなあ。

.....

.....

∴

ダメだ、この現実からは逃げられない。

えらい人は言いました。

現実がダメなら――

「∴∴∴∴∴∴∴（読書中）」

――読書があると。

第一問（後書き）

あとがき

感想、ご意見等ありましたら、どしどし書いてください。
お気に入り登録や評価もよろしくお願いします。

第二問

第二問

しばらく現実逃避《読書》していると、僕を呼ぶ声が聞こえた。

「自己紹介をおねがいします」

いつの間にか自己紹介の順番になっていたようだ。

「七伏博人〔ななふしはくと〕です。趣味は昆虫採集です。よろしくお願いします」

席についてふたたび読書を始める。

少したってから、教室のドアが開かれた。

そこには息を切らせて胸に手を当ている女子生徒と、従姉である杉本秋音〔すぎもとあきね〕。ウチに居候中の背の低い（中学生くらい）物理教師だ。

「ちょうど良かったです。今自己紹介をしているところなので姫路さんと杉本先生もお願いします」

「は、はい！あの、姫路瑞希といいます。よろしくお願いします：……」

つづいて秋音姉。

「私は杉本秋音。Fクラスの副担任の物理教師だよ♪よろしくね！」
その後本来Aクラスにいるはずの姫路さんが何故Fクラスにいるかという話になったが、風邪による途中退席が原因だそうだ。

僕の場合は色々あつての遅刻なんだけど。

教卓がぶっ壊れたり、なんやかんややっているうちに、最後の自己紹介になった。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ」

坂本雄二。高身長で、タテガミのような髪が特徴の僕の悪友。

「さて、皆に一つ聞きたい」

雄二は教室内の各所に目を移す。

かび臭い教室。

古く汚れた座布団。

薄汚れた卓袱台。

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが――」

一呼吸入れて静かに告げる。

「――不満はないか？」

『大ありじゃあっ!!』

ですよね。

そして雄二はその状況を改善するため、あることを提案した。

「FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

第二問（後書き）

あとがき

感想、ご意見等ありましたら、お願いします。
お気に入り登録や評価もよろしくお願いします。

第三問

第三問

Aクラスへの宣戦布告。

クラス内からも否定的な意見がでるほどAクラスとFクラスの戦力の差は明らかだ。

ここ文月学園では、上限の無いテストの点数に応じた強さの自身をデフォルトした召喚獣を使い、クラス間での戦争が行われる。

つまり、学力が最高のAクラスとFクラスでは天と地ほどの差があるということだ。

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」

その戦力差を知りながらも、雄二は堂々と宣言した。

そして、Aクラスに勝てるという根拠をこれから説明したくれるらしい。

まず始めに呼ばれたのは畳に顔をつけて姫路さんのスカートを覗いていた土屋康太。

顔に残る畳の後を隠しながら壇上にあがる。

「こいつがあ有名なムツツリーニだ」

「……………！！（ブンブン）」

ムツツリーニ、簡単に言うともムツツリスケベだ。

ただし、そのムツツリ度は常人の比ではない。

「姫路のことは説明する必要もないだろう。皆だってその力はよく知っているはずだ」

試召戦争に至るとしたら強力な戦力となるだろう。

「木下秀吉だっている」

木下秀吉。演劇部のホープで、双子の姉の木下優子が有名だ。

そして途中にキングオブバカ、吉井明久をバカにした後ぼくの名前がよばれた。

「七伏博人。こいつはこのクラスの秘密兵器といってもいい。皆も昆虫少年という名前は聞いたことがあるだろう」

『Aクラスレベルって話だよな』

『運動もすごいってきいたぜ』

『まさに秘密兵器って訳だ』

「明久にはDクラスへの宣戦布告の死者になってもらう。無事大役を果たせ！」

別に誤字ではないと思う。

明久は最初は渋っていたが、あっさり騙されて意気揚々とDクラスへ向かっていた。

「騙されたあっ！」

「やはりそうきたか」

満身創痍といった体の明久が転がり込んできたが、別に予想通りだったので特にリアクションはしなかった。

「あの程度でだまされる明久がわるかったんだよ」

さて、これで本格的にDクラスと戦争になるわけだが僕の役目は秘密兵器。

つまりなにが言いたいかっていうと、Dクラス戦では秘密兵器はズット秘密だったってことだ。

結果は、相手の代表に姫路さんが奇襲をかけておわったそうだ。

第三問（後書き）

あとがき

感想、ご意見等ありましたら、お願いします。
お気に入り登録や評価もよろしくお願いします。

第四問

第四問

Dクラス戦が終わり、行平とメープルと一緒に帰る。

「試召戦争ご苦労様でした」

「最終目標はAクラスってどこっすか？」

「うん、そうだよ。というかいつも通りのしゃべり方でいいんじゃない？」

メープルの『くす』という口調は本人曰わくキャラ作りだそうだ。

いつもは普通の口調なんだけど、何か意味あるのかなあ？

「ねえ、それじゃあさ、ちょっと勝負してみない？」

ふむ、勝負か……。

「内容によるね」

「ハク達がAクラスに勝ったらハクの、負けたら私の言うことを聞くっていうのはどう？」

「うん、乗った」

実は結構賭事好きだったりする。

ちなみに一番好きなのはポーカーだ。

でも、わざわざ勝負を仕掛けてきてまで、僕に聞いてほしいことがあるのだろうか？

「それじゃ、また明日！」

メーブルの家の前で別れ、すぐ隣の我が家に入る。

明日は点数補充テストがあるので一通り教科書に目を通しておく。

翌朝、いつも通り学校に向かう。

今日は昨日試召戦争で消費した点数の補給テストになる。

僕としては、このテストが今後の戦力となるので少し気合いを入れてやっておく。

おそらく、雄二は強力な駒である僕を、重要な位置で使うだろう。

つまり、Fクラスの勝負は僕にかかる。

Aクラスと戦う前に負けては、約束が果たせない。

せっかくの試召戦争、楽しい戦いをしないと。

第五問

第五問

4教科のテストが終わり、昼休みとなったのでFクラスのいつものメンバーと行平とメープルを加え弁当を食べていたのだが――

ガクガクガクガクガクガクガク

姫路さんの弁当を食べたムツツリーニと雄二が大ダメージを負って倒れていた。

生存者で作戦会議を行い、僕は一つの結論を出した。

（僕は自分の弁当あるから、姫路さんの弁当は遠慮させてもらう）

（私もまだ死にたくないっす）

（頑張ってください）

見捨てましょう♪

（そんな！ひどいよ！）

（俺達は仲間だろ！）

明久と復活した雄二が生贄を増やそうと必死だが、無視して三人で和やかに食事を再開する。

雄二が犠牲となることで場がおさまったと思ったが、デザートがあり、秀吉がさらなる犠牲となった。

「そういえば坂本、次の目標だけど」

「ん？ 試召戦争のか？」

「うん」

「あれ？ 私達が聞いても良いっすか？」

「ああ、別にお前たちは大丈夫だろ。博人と戦いたいだろうしな」

「そうですね。公式の場で雌雄を決するというのも、楽しそうです」

「私が相手をするっすから、ユキは控えてていいっす」

「いえいえ、兄弟対決というのもおもしろいではありませんか？」

「まあまあ2人とも。どうなるかはわからないんだし、今は保留で良いでしょ」

姫路デザートで死にかけた秀吉に明久が大量に茶を飲ませている。確かに抗菌作用があるが、姫路さんの料理に入っているのは化学物

質だから効果は得られないだろう。

「相手はBクラスなの？」

「ああ。そうだ」

Aクラスを目標とするのに、なぜBクラスと戦うのかという島田さんの質問だが、おそらくAクラスと有利な状況で戦うためにBクラスを利用するつもりだろう。

「正直に言おう。どんな作戦でも、うちの戦力じゃには勝てやしない」

雄二らしくもない戦う前からの降伏宣言。

Aクラスの約四十人はBクラスよりも少々点数が上のふつうの生徒だ。

しかし残り10人の点数はずば抜けて高い。

Fクラスのふつうのメンバーでは全員で取り囲んでもやられてしまうだろう。

だから雄二は一騎打ちに持ち込む作戦のようだ。

Bクラスはそのため脅しの使うつもりらしい。

今回も明久がBクラスへの死者（使者）にされ、役目を果たしてロボロになって帰ってきた。

第五問（後書き）

あとがき

感想、ご意見等ありましたら、お願いします。
お気に入り登録や評価もよろしくお願いします。

第六問

第六問

Bクラス戦。今回はまずは防御側にまわり、雄二の護衛として掃除用具入れに隠れていた。

俺が呼ぶまで出てくるなという雄二の指示通り、ずっと。

現在、Cクラスに不穏な動きがあり、不可侵条約を結ぼうということになった。

しかし、引っかかる事がある。

Cクラスの代表とBクラスの代表が付き合っているという噂のことだ。

「雄二！不可侵条約を結ぶのに、僕も連れて行ってほしい！」

掃除用具入れの中なので、大きめの声で叫ぶ。

「……………分かった。出てこい」

意図を察してくれたのか、少し考えてから了解してくれた。

秀吉を残して、Cクラスに向かう。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。このクラスの代表は？」

「私だけど、何か用かしら？」

前に出てきたのは、気が強そうな女子の小山友香さんだ。

「Fクラス代表としてクラス間交渉に来た。時間はあるか？」

「クラス間交渉？ふうん……」

「ああ。不可侵条約を結びたい」

「不可侵条約ねえ……。どうしようかしらね、根元クン？」

予想通り、教室の奥から根元恭二が現れた。

「当然却下。だって、必要ないだろ？」

「なっ！？根元君！Bクラスの君がどうしてこんなところで！」

Fクラスをはめるためです。

取り巻きも7人ほど見える。ちょうど良い。

4時までには決着がつかなかったら翌日に持ち越しという協定を盾にして、攻撃を仕掛ける……。か。残念ながら予想通りでしかないこの作戦はもう意味が無い。

「長谷川先生！Bクラス芳野が召喚をー」

「Fクラス、七伏が受けます。試獣召喚」

雄二達を教室から逃がし、相手と向き合う。

チャンスは簡単にピンチに変わるってことをしっかり教えてあげよう。

「Bクラスの皆さん。コレだけでは役不足なので、まとめてかかってきてください」

Fクラスの生徒にバカにされたからか、簡単に挑発にのってくる。

『試獣召還！』

残りの六人も召還をし、点数が表示される。

『Bクラス モブキャラ×7

数学 平均150くらい

Fクラス 七伏博人

数学 684点』

僕の召還獣は武器は両手のクロー、足の鉤爪、肘のブレード。防具はすねのアーマーと全身にフィットしている服だけだ。

相手が動き始める前に一人目に肉薄し、クローで頭を斬る。

そのとなりの二人目は肘のブレードを突き刺す。三人目は膝蹴りを食らわせ、四人目と五人目は両手を広げてクローで同時に斬りつけ

る。

六人目を七人目の方向へ蹴り飛ばし重なったところをかかと落としで決める。

流れを乱さず、4秒程度で始末を終える。

教室を見回すと、慌てて逃げる根元の姿が見えたが雄二達と合流する事を優先し、教室を後にする。

実際1分位しかCクラスにいなかったのも、すぐに追いつく。明久と島田さんがみえないが、教室外に配置された追撃部隊を引きつけているらしい。

作戦は把握しているし、行平とメープルが待っているなので一足先に帰るとしよう。

第七問

第七問

この戦争の勝者に戦争を仕掛けるであろうCクラス対策に秀吉を要とした作戦を行う。

僕がつつこんでもCクラス相手だと殲滅に20分位かかるから、無駄な戦争はやらないに越したことはないだろう。

今回の作戦は秀吉に女子の制服を着せて双子の姉であるAクラスの木下優子の演技をして挑発してもらい、Cクラスの敵意をAクラスに向けようというものだ。

僕が行平の真似をするという意見は始めからない。顔は結構似ているが、身長が僕の方が明らかに低い。

「と、いうわけで秀吉。用意してくれ」

「う、うむ……」

制服を受け取り、その場で着替え始める秀吉。

同性の着替えなのにガン見している明久の考えがよくわからない。

「……………（パシャパシャパシャパシャ！）」

ムツツリーニは指が擦り切れるんじゃないかってほどの速さで連写していた。

「よし、着替え終わったぞい。ん？皆どうした？」

僕にもなぜクラスの皆が複雑な表情をしているのかわからない。

「まあ、とりあえずCクラスに行こうよ」

「ああ、そうだな」

「うむ」

秀吉を連れて教室を出て行く。

「あ、僕も行くよ」

その後を明久が慌てて追いかけてくる。

FクラスからCクラスまでは結構離れているので、しばらく歩く。

「それじゃあ秀吉、ここからは一人をお願い」

Aクラスの使者になりすますので、僕達は同行できない。

よって、離れた場所から様子を窺う。

「気が進まんのう……」

「そこを何とか頼む」

「むう……。仕方ないのう……。…」

「とにかくCクラスを挑発してAクラスに敵意を抱くように仕向けて。頼んだよ、演劇部のホープ」

「あまり期待はせんでくれ」

ガラガラガラと秀吉がCクラスの扉を開ける音が聞こえる。

『静かになさい、この薄汚い豚ども!』

……。…。…。…。。

「流石だな、秀吉」

「意外とノリノリだね」

「うん。これ以上はない挑発だね……。…」

この時点でCクラスの敵意はもうAクラスに向いていることだろう。

『な、何よアンタ!』

この声は昨日会ったCクラス代表の小山さんのものだろう。

当然だが、いきなり豚呼ばわりされて怒気を含んでいる。

『話しかけないで! 豚臭いわ!』

自分から来くせに豚臭いというツツコミどころ満載のセリフだが、Cクラスからツツコミの声はあがらない。

まさかCクラスはツツコミが不足しているのか？

『アンタ、Aクラスの木下ね？ちょっと点数良いからっていい気になってるんじゃないわよ！何の用よ！』

知名度としては秀吉よりAクラスの優子のほうが高い。

そもそも女装しているので簡単には見分けがつかない。その上挑発して冷静に判断ができないようにしている。

かなり良い作戦と言える。

………木下さんの風評以外は。

『私はね、こんな臭くて醜い教室が同じ校内にあるなんて我慢ならないの！貴女達なんて豚小屋で充分だわ！』

『なっ！言うに欠いて、私達にはFクラスがお似合いですっ
！？』

いや、誰もFクラスとは言っていないうえに、豚小屋の方がFクラスより衛生的だと思う。

『手が汚れてしまうから本当は嫌だけど、特別に今回は貴女達を相応しい教室に送ってあげようかと思うの。ちょうど試召戦争の準備もしている様だし、覚悟しておきなさい。近いうちに、私達が

薄汚 いブタの貴女達を始末してあげるから!』

そう言い残し、靴音を立てて教室から出てきた。

「これで良かったかのう？」

どこかスッキリした顔で秀吉が近寄ってくる。

「それはもう素晴らしい仕事ぶりだったよ」

『Fクラスなんて相手にしてられないわ! Aクラス戦の準備を始めよう!』

「作戦もうまくいったし、僕達も今日の戦争の準備をしよう。あと10分で始まるよ」

第八問

第八問

Bクラス戦が始まってからしばらくすると、戦線にいるはずの明久が駆け込んで来た。

「雄二っ！」

「うん？どうした明久」

「脱走だったらチョキでシバくよ」

「話があるんだ」

「……とりあえず、聞こうか」

どうやら今は冗談に付き合っている暇はないらしい。

それを察して真面目な顔で向き合う。

「根元君の着ている制服が欲しいんだ」

「……お前に何があったんだ？」

明久は真面目な顔で男子の制服を欲しがる変態だったのか……。

「ま、趣味は人それぞれだからね」

「そうだな、勝利の暁にはそれくらいなんとかしてやろう」

「で、話はそれだけ？」

本当にこれだけだったら半殺しにしても文句は言われないだろう。

「それと、姫路さんを今回の戦闘から外して欲しい」

「理由は？」

「理由は言えない」

どうやらこっちが本題ってことかな。

「どうしても外さないダメなの？」

「うん。どうしても」

雄二が顎に手を当てて考え込む。

貴重な戦力である姫路さんを戦闘から外すなんて自殺行為といってもいい。

「頼む、雄二！」

明久は深く頭を下げてくる。

ノーリターンでハイリスク。はっきり言って無謀だ。

「……条件がある」

「条件？」

「姫路がやるはずだった根元に攻撃をしかける役目をお前がやれ。」

「もちろんやってみせる！絶対に成功させるさ！」

「良い返事だ」

おっと、そろそろ僕も行動開始の時間ようだ。

「明久。お前にはお前の強みがある。それをうまく使ってみな」

一言残し、教室を出て行く。

第九問

第九問

『お前らしい加減諦めろよな。昨日から教室の出入り口に人が集まりやがって。暑苦しいことこの上ないっての』

遠くから根元の声が聞こえてくる。

『どうした？軟弱なBクラスの代表サマはそろそろギブアップか？』

姫路さんを戦闘に参加させていないので、雄二率いる本隊も出動せざるを得なくなったのだろう。

『はア？ギブアップするのはそっちだろ？』

『無用な心配だな』

『そうか？頼みの綱の姫路さんも調子が悪そうだぜ？』

『……お前ら相手じゃ役不足だからな。負け組代表さんよお』

『負け組？それがFクラスのことなら、もうすぐお前が負け組代表だな』

『……さっきからドンドンと、壁がうるせえな。何かやっている

のか？」

『さあな。人望のないお前に対しての嫌がらせじゃないのか？』

『けっ。言ってる。どうせもうすぐ決着だ。お前ら、一気に押し出せ！』

『……態勢を立て直す！一旦さがるぞ！』

さてと、そろそろ出番かな。

『どうした、散々ふかしておきながら逃げるのか？』

退却を始める雄二達と入れ替わるように廊下の窓から校舎に入る。

「Fクラス、七伏博人がここにいるBクラス全員に化学勝負を申し込めます。試獣召還！」

『Fクラス 七伏博人
化学 672点』

「速攻で殲滅だ！」

フィールドを駆け抜けながら殲滅をする。

こんなヤツらじゃ弱すぎて話にならない！

「だああーっしやあーっ！」

明久がDクラス側の壁をぶち破って入ってくる。

物理干渉能力をもつ、観察処分者ならではの作戦だ。

しかし、彼らはBクラスの近衛兵に囲まれてしまう。

ちょうどこちらはBクラスの殲滅戦が粗方終わった。

ちょうどそこに保体教師を連れてムツツリーニが窓からやってくる。

「……Fクラス、土屋康太」

「待った！ムツツリーニ！こいつは僕が片づける！先生、根元恭二に勝負を申し込みます」

明久達が近衛兵を引きつけたので、丸裸になった根元。これで詰みだ。

『Bクラス 根元恭二

化学 198点

Fクラス 七伏博人

化学 632点』

「少しは面白い戦いができると思ったんだけど、残念だ」

先ほど召喚した召喚獣をそのまま引き連れてクローで一閃。

これでBクラス戦は終結した。

第十問

第十問

「ずいぶん思い切った行動にでたね。明久」

終戦後、拳をおさえている明久に、声をかけておく。

「うう……。痛いよう、痛いよう……」

100%全てがフィードバックしないとはいえ、素手で鉄筋コンクリートを壊したのだからその痛さは並みじゃない。

「なんとも……。お主らしい作戦じゃったな」

「で、でしょ？もっと褒めてもいいと思うよ？」

「後のことは考えず、自分の立場を追い詰める男気溢れる作戦だったね」

「……遠まわしに馬鹿って言ってない？」

何を行っているんだ明久は？

「その通りだけど」

「ウキィー！」

いきなり襲いかかってくるので、鳩尾に拳を叩き込んで黙らせる。

「ま、それが明久の強みだからな」

雄二がバンバンと明久の肩をたたく。

「さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談といくか。な、負け組代表？」

「……」

床に座り込んでいる根元。さっきまでの強気が嘘のようだ。

「本来なら設備を明け渡してもらい、お前らには素手な卓袱台をプレゼントするところだが、特別に免除してやらんでもない」

そんな雄二の発言に、ざわざわと周囲が騒ぎ始める。

カン！カン！カン！

「静粛に！静粛に！前にも言ったけど僕達の目標はAクラス。ゴールはここじゃない」

「うむ。確かに」

「ここはあくまで通過点だ。だから、Bクラスが条件を呑めば解放してやろうかと思う」

その言葉でクラスの皆が納得したような顔になった。

Dクラス戦でも同じことを言っただろうから、雄二の性格を皆理解し始めたんだろう。

「……条件はなんだ」

「条件？それはお前だよ、負け組代表さん」

「俺、だと？」

「ああ。お前には散々好き勝ってやってもらったし、正直去年から目障りだったんだよな」

「凄い言いようだが、誰もフォローしない。それだけのことをやっているからだ。」

「そこで、お前らBクラスに特別チャンスだ」

おそらくこれがAクラス戦との取引材料になるのだろう。

「Aクラスに行つて、試召戦争の準備が出来ていると宣言して来い。そうすれば今回は設備については見逃してやってもいい。ただし、宣戦布告するな。すると戦争は避けられないからな。あくまでも戦争の意思と準備があるただけ伝えるんだ」

「……………それだけでいいのか？」

それだけな訳がないだろうが。

「ああ。Bクラス代表がコレを着て言った通りに行動してくれたら見逃そう」

そう言って雄二が取り出したのは秀吉の時と同じ、女子用の制服。

これは明久の要望を叶えるためと、雄二の個人的感情だろう。

「ば、馬鹿なことを言うな！この俺がそんなふざけたことを……」

根元が慌てふためく。そりゃあ嫌だよね。

ま、嫌がっても関係ないし。

『Bクラス生徒全員で必ず実行させよう！』

『任せて！必ずやらせるから！』

『それだけで教室を守られるなら、やらない手はないな！』

何よりBクラスからの声援もある。

「んじゃ、決定だな」

「くっ！よ、寄るな！変態ぐふうっ！」

「とりあえず黙らせました」

「お、おう。ありがとう」

一瞬で根元を見限って腹部に拳を打ち込むBクラスの男子。

いい仕事するね。

「では、着付けに移るとするか。明久、まかせたぞ」

「了解っ」

明久はぐったりと倒れている根元に近づき制服を脱がせる。

ここからは見えていて毒なので身を翻して帰宅を決意した。

第十問（後書き）

あとがき

感想、ご意見等ありましたら、お願いします。
お気に入り登録や評価もよろしくお願いします。

第十一問

第十一問

Bクラス戦が終わり、2日たった。

残すはAクラス戦のみとなり、もうすぐ別れる予定のFクラスの教室で最後の作戦の説明をしている。

「まず皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能だと言われていたにも関わらず此処まで来れたのは、他でもない皆の協力があったことだ。感謝している」

「ゆ、雄二、どうしたのさ。らしくないよ?」

「ああ。自分でもそう思う。だが、これは俺の偽らざる気持ちだ」

まあ、Fクラスなのにここまでこれたのはたいしたことだと、僕も思う。

「ここまで来た以上、絶対にAクラスにも勝ちたい。勝って、生き残るには勉強すればいいでもんじゃないという現実を突きつけるんだ!」

『おおーっ!』

『そうだーっ!』

『勉強だけじゃねえんだーっ!』

勉強だけじゃないからって疎かにしていいわけじゃないけどね。

「今日のAクラス戦だけど、一騎打ちで決着をつけたいと思う」

雄二の隣で説明すると、教室中にざわめきが広がった。

『どうということだ?』

『誰と誰が一騎打ちするんだ?』

『それで本当に勝てるのか?』

「落ち着いてくれ。それを今から説明する」

雄二がバンバンと机を叩いて静まらせる。その衝撃で壊れないか心配だ。

「やるのは当然、俺と翔子だ」

実際誰が考えても不可能だと思うが、それをあえて作戦とするのだから裏があるのだろう。

「馬鹿の雄二が勝てるわけなああっ!?!」

裏を読めない馬鹿は雄二からの洗礼としてカッターが頬を掠めた。

「次は耳だ」

「顔面じゃなくて良かったね、明久」

耳なら当たっても生きていけるだろう。

「まあ、明久の言うとおり確かに翔子は強い。まともにやりあえば勝ち目はないかもしれない」

「だけど、それはDクラスとBクラスの時も同じ。まともにやりあったら勝てなかった」

だけど僕達は勝ち進んできている。

「今回だって同じだ。俺は翔子に勝ち、FクラスはAクラスを手に入れる。俺達の勝ち揺るがない」

最初は皆勝てないと思っていた試召戦争を勝利に導いた雄二の言葉だ。それを否定する人間はこのクラスにはいないだろう。

「俺を信じて任せてくれ。過去に神童とまで言われた力を、今皆に見せてやる」

『おおおーっ!!』

「さて、具体的なやり方だが……一騎打ちではフィールドを限定するつもりだ」

「フィールド？何の教科でやるつもりじゃ？」

「日本史だ」

霧島さんが日本史が不得手としているとも、雄二が得意としているとも聞いたことはない。

「ただし、内容は限定する。レベルは小学生程度、方式は百点満点の上限あり、召喚獣勝負ではなく純粋な点数勝負とする」

小学生レベルで上限あり。この内容だと満点が前提になり、ミスをした方が負けるといった注意力が勝負の鍵となる。

「でも、同点だったら、きっと延長戦だよ？ そうなったら問題のレベルも上げられちゃうだろうし、ブランクのある雄二には厳しくない？」

「確かに明久の言う通りじゃ」

「おいおい、あまり俺を舐めるなよ？ いくらなんでも、そこまで運に頼り切ったやり方を作戦などと言うものか」

「？？ それなら、霧島さんの集中力を乱す方法でも知っているとか？」

「いや。アイツなら集中なんてしていなくても、小学生レベルのテスト程度なら何の問題もないだろう」

先生の監視がある中での妨害程度で主席がミスするとは思えない。

「雄二、あまりもったいぶらないでそろそろタネ明かししてたほうがいい」

「ああ、すまない。つい前置きが長くなった」

「雄二がこのやり方を採ったのは、ある問題が出れば、霧島さんは確実に間違えるから、だよな？」

「ああ、ある問題――『大化の改新』が出ればアイツは必ず間違える」

「大化の改新？誰が何をしたのか説明しろ、とか？そんなの小学生レベルの問題で出てくるかな？」

小学生レベルで出てこないって自分で言っているんだから、ほかの問題だよ。勝手に結論を出すのは愚かしいぞ。

「もっと単純に、何年に起きた、とかじゃないかな？」

「ビンゴだ博人。お前の言う通り、その年号を問う問題が出たら、俺達の勝ちだ」

こんな基礎的な問題を学年主席が間違える……雄二がそのことを知ってるってことは、何か繋がりがあるはず。

「大化の改新が起きたのは、645年」

「こんな簡単な問題、明久ぐらいじゃないと間違えない」

「だが、翔子は間違える。そうしたら俺達の勝ち。晴れてこの教室とおさらばって寸法だ」

さっきから少し気になっていたけど――

「あの、坂本君」

「ん？なんだ姫路」

「霧島さんとは、その……仲が良いんですか？」

さっきから霧島さんのことを、アイツとか翔子とか呼んでいた。

ここで解答を間違えると明久達に襲われるだろう。

「ああ。アイツとは幼なじみだ」

「総員、狙ええっ！」

「なっ！？なぜ明久の号令で皆が急に上履きを構える！？」

「黙れ、男の敵！Aクラスの前にキサマを殺す！」

「待て、そんなこと言うなら博人はAクラスの佐藤楓と毎日一緒に登下校しているぞ」

「うん。メープルとは幼なじみだからね」

「聞いたか！？今愛称で呼んでいたぞ！狙うならコイツが先だろ！」

愛称って言うほどじゃないと思うけどなあ。

佐藤楓↓さとうかえで↓サトウカエデ↓メープルってだけだしね。

現在ほとんどの男連中が僕に向かって上履きを構えている。

「なに？やるつもり？」

カッターを投擲姿勢で構えて笑顔で問いかける。

このクラスをまとめるには武力が適していると思う。

『……………』

よし、鎮圧成功。

何故か明久が島田さんと姫路さんに戦闘態勢を取られているがこの際無視していいだろう。

「とにかく、俺と翔子は幼なじみで、小さな頃に間違えて嘘を教えていたんだ」

幼なじみだから弱点を知っていたということか。

「アイツは一度覚えたことは忘れない。だから今、学年トップの座にいる」

でも今回はそれが仇となるってわけだ。

「俺はそれを利用してアイツに勝つ。そうしたら俺達の机は――」

『システムデスクだ！』

第十二問

第十二問

「一騎打ち?」

「ああ。Fクラスは試召戦争としてAクラス代表に一騎打ちを申し込む」

恒例の宣戦布告。今回は代表の雄二と、僕、明久、姫路さん、秀吉、ムッツリーニと首脳陣が勢ぞろいだ。

しかしこれでは明久がボロボロにならない。少々残念だ。

「うーん、何が狙いなの?」

雄二と交渉のテーブルについてるのは秀吉の姉、木下優子だ。

「もちろん俺達Fクラスの勝利が狙いだ」

木下さんが訝しむのも当然だろう。下位クラスの僕達が一騎打ちで学年トップに挑むのはあまりに不自然だからだ。

「面倒な試召戦争を手軽に終わらせることが出来るのはありがたい

けどね、だからと言ってわざわざリスクを犯す必要は無いかな」

「賢明だな」

予想通りの返答。ここからが交渉の本番だ。

「ところで、Cクラスとの試召戦争はどうだった？」

「時間は取られたけど、それだけだったよ？何の問題もなし」

「Bクラスとやりあう気はあるか？」

「Bクラスって……。昨日来ていたあの……」

「ああ。アレが代表をやっているクラスだ。幸い戦線布告はまださ
れていないようだが、さてさて。どうなることやら」

「でも、BクラスはFクラスと戦争したから、三ヶ月間の準備期
間を取らない限り試召戦争は出来ないはずだよね？」

試召戦争の決まりである、準備期間。

泥沼化を防ぐために、敗北したクラスは3ヶ月間試召戦争を申し込
む権利を失うというものだ。

「知っているだろ？実情はどうあれ、対外的にはあの戦争は『和平
交渉にて終結』ってなっているってことを。規約には何の問題もな
い……Bクラスだけじゃなくて、Dクラスもな」

これは今まで設備を入れ替えなかったからこそできる方法だ。

「…………それって脅迫？」

「もちろん！」

自信満々で答えてやれば、相手は何も言えないだろう。

「…………何を企んでいるのか知らないけど、代表が負けるなんてありえないからね。その提案受けるよ」

代表同士の対決だったら雄二に勝ち目があるとは思えないだろう。

「え？ 本当？」

あまりにあっさり決まったからか、明久が驚いて声をあげた。

「だって、あんな格好した代表のいるクラスと戦争なんて嫌だもん……………」

微妙なところで根元が役に立ったな。

「でも、こちらからも提案。代表同士の一騎打ちじゃなくて、そうだね、お互い五人ずつ選んで、一騎打ち五回で三回勝った方の勝ち、っていうのなら受けてもいいよ」

「う……………」

やはり警戒されているようだ。

「なるほど。こっちから姫路か博人が出てくる可能性を警戒してい

るんだな？」

「うん。多分大丈夫だと思うけど、代表が調子悪くて姫路さんが絶好調だったら、問題次第では万が一があるかもしれないし、七伏君相手だとどうなるかわからないからね」

優子が僕のことを呼び捨てなのは、メールと優子がよく一緒にいるので必然的に交友があるからだ。

「安心してくれ、うちからは俺が出る」

「無理だよ。その言葉を鵜呑みに出来ないよ。これは競争じゃなくて戦争だからね」

「そうか。それなら、その条件を吞んでも良い」

一騎打ち五回か……。結構いけそうだね。

「ホント？嬉しいな♪」

「けど、勝負する内容はこちらで決めさせて貰う。そのくらいのハズデ はあってもいいはずだ」

「え？うーん……」

さすがに戦争の勝ち負けが係わって くる内容なだけに悩んでいるようだ。

「……受けてもいい」

「うわっ！」

明久は、静かに現れた霧島さんに驚いたようだ。別に驚くほどのことでもないだろうに。

「……雄二の提案を受けてもいい」

「あれ？代表。いいの？」

「……その代わり、条件がある」

「条件だと？」

「……うん」

霧島さんは雄二を見た後、姫路さんをみて再び雄二を見た。

「……負けた方は何でも一つ 言うことを聞く」

後ろで馬鹿二人が何かやっていたが、雄二も気にしていないようなので無視することにした。

「じゃ、こうしよう？勝負内容は五つの内三つそっちに決めさせてあげる。二つはうちで決めさせて？」

全部とはいかなかったが、妥協案が得られた。

「そのぐらいなら問題ないよね？」

「ああ。交渉成立だ」

「ゆ、雄二、博人！何を勝手に！まだ 姫路さんは了承していないじゃない か！」

は？なんでそこで姫路さんが出てくるの？

「心配すんな。絶対に姫路に迷惑はかけない」

姫路さんに迷惑はかけないってことは誰かが犠牲になるのか？

「……勝負はいつ？」

「そうだな。十時からでいいか？」

「……わかった」

「交渉は成立したし、一旦教室に戻ろう」

「そうだね。皆にも報告しなくちゃいけないからね」

第十三問

第十三問

「では、両名共準備は良いですか？」

今日はAクラスの担任で学年主任である高橋先生が立会人を務める。
暇なのか秋音姉も教室内で観戦している。

「ああ」

「……………問題ない」

一騎打ちの会場はAクラス。オンボロ教室じゃあ狭すぎるからね。

「それでは一人目の方、どうぞ」

「アタシから行くよっ」

向こうは秀吉の姉の木下優子さん。

対するこちらは、

「ワシがやろう」

その弟である秀吉だ。

姉弟だからこそ、弱点や集中力の乱し方を知っているはず。

「ところでさ、秀吉」

「なんじゃ、姉上？」

「Cクラスの小山さんって知ってる？」

「はて、誰じゃ？」

小山――Cクラスの代表で秀吉が優子の演技をして豚呼ばわりした人物。

「じゃーいいや。その代わり、ちょっとこっちに来てくれる？」

「うん？ワシを廊下に連れ出してどうするんじゃ姉上？」

おそらく抹殺するつもりだと思います。

「姉上、勝負は――どうしてワシの腕を掴む？」

「アンタ、Cクラスで何してくれたのかしら？どうしてアタシがCクラスの人達を豚呼ばわりしたことになるのかなあ？」

「はっはっは。それはじゃな、姉上の本性をワシなりに推測して――あ、姉上っ！ちがつ……！その関節はそっちには曲がらな……！」

ガラガラガラ

扉を開けて優子が戻ってくる。

「秀吉は急用できたから帰るってさっ。代わりの人を出してくれる？」

「それじゃあ、僕がいこうかな」

ハンカチで返り血を拭う優子の前にでる。

「急にこっちが代わっちゃったから、お詫びとして三対一でやらせて」

「自分がいくっす」

「では私も」

名乗り出てくるのはメープルと行平。

「ちょ、ちょっと！いくら相手が強敵だからって三対一は……」

「本気でこないと、負けるよ？それでは物理でお願いします」

「それでは召喚をしてください」

「」「試獣召還」「」

魔法陣が現れ、四体の召喚獣が出現する。

一体目、おなじみの僕の召喚獣。

二体目、西洋風の鎧にランスを持った優子の召喚獣。

三体目、左手に盾、右手に刀を持ち、和服姿のメーブルの召喚獣。

四体目、スーツとシルクハットを装備し、手には銃のようなシルエットで、弓のようなパーツのついた――

「繚乱の対弩!?!」

銀と金のフレームを持ったボウガン。なんであんなものを持っているんだ。

『Aクラス 木下優子

物理 321点

Aクラス 佐藤楓

物理 398点

Aクラス 七伏行平

物理 399点

Fクラス 七伏博人

物理 798点』

「あれ?メーブルも行平も振り分け試験は調子悪かったの?」

今表示されてるのはAクラスの人振り分け試験の点数のままのはずだ。

いつもは450点ぐらいのはずなんだけど。

「ハクのこと心配だったっす」

確かにあの日は遅刻しちゃったからなあ……。

「ありがと。それじゃあ、始めよう」

400点ってないというのありがたい。400点オーバーでなければ腕輪の使用はできないからね。

三対一は分が悪いので、やっぱり作戦は――

「始め！」

先手必勝だ。

一瞬で優子の前まで移動し、クローをクロスさせて全力で攻撃する。

完全な不意打ちなので、ランスの腹でかろうじて防がれたが勢いよく吹っ飛ぶ。

行平とメープルの方を見ると行平は弾の装填を終え、メープルは盾を構えていた。

『Aクラス 木下優子
物理 102点』

ふむ、一撃では倒せなかったか。

今度は盾を構えているメーブルの前行き、回り込もうとするが、行平により妨害される。

若干ぎこちない動きから、召喚獣に慣れていないことがわかる。

しかし樂觀してはいられない。おそらく一分もしたら二人とも慣れてしまうだろう。

必然的に短期決戦に持ち込むしかない。

少し離れている行平に距離をつめ、クローで斬りつける。

すんでのところでかわされ、結果は肩を切り裂くだけとなった。

『Aクラス 七伏行平

物理 273点』

もう一撃加えようとするが、後ろからメーブルが切りかかってくる。

それをブレードで受け流し、メーブルが武器を持っている右手をつかみ、行平との対角線上に動かす。

行平が放った銃弾がメーブルに迫るが、盾で弾かれたので、蹴り飛ばして距離をとる。

復活した優子がランスで突進してくるが、横にステップして回避。

行平により銃弾が放たれたので、優子に追撃するのを諦めて弾をはじく。

僕は今のところノーダメージで戦っている。操作の危うい相手に対して、素早い動きの僕は戦いにくいのだろう。

僕の武器は素早さ。防具がほとんど無いかわりに、高速戦闘が可能だ。

速さに乗れば力が弱くとも重く、攻撃に当たらなければ防御は必要ない。それが僕の戦い方。

優子とメーブルが同時に攻撃を仕掛けてくる。

ランスは近い間合いだと突くことができない。

よって、優子を最初に仕留めることにした。

メーブルの剣を左手で弾きながら、突いてきたランスを紙一重でかわし、その腹を踏み、地面に押さえつけてランスの動きを封じる。

無防備なその体に、ブレードを一閃。撃破する。

しかし、疎かになっていたメーブルの盾による打撃と、行平の狙撃を受けてしまった。

『Aクラス 佐藤楓

物理 314点

Aクラス 七伏行平

物理 273点

Fクラス 七伏博人
物理 403点』

一旦距離をとり、再び攻撃する。

しかし、メープルは刀で防御し、クローの刃と刃の間に刀を入れてきた。

速さを充実した戦い。しかしヒットアンドアウェイではなく、勢いを殺さず流れて攻撃する。無駄を省き、攻撃を繋げているので、動きを攻撃を受け止められると動きが止まってしまう。

今がまさにそれだ。

動きを止めた僕に、行平は容赦なく狙撃してくる。

すぐに回避にうつるが、2、3発当たる。

『Fクラス 七伏博人
物理 301点』

だいぶ慣れてきた二人は始めに比べだいぶ厄介だ。

まずはサポート重視の行平を倒すことを目標にする。

牽制で放たれる銃弾をかわし、肉薄する。

右手の攻撃は銃身で防がれるが、左手の攻撃は当たる。

しかし一人に集中することは、もう一人を疎かにすること。

メーブルの刃が今にも当たるというところで、腕輪の能力を発動する。

「来い、ジャコウアゲハ」

メーブルの剣は、突然現れた蝶『ジャコウアゲハ』に防がれた。

攻撃を防がれ、無防備なところにフェイントをいれ、後ろに回り込んで蹴り飛ばす。

盾で防御姿勢をとっていたメーブルは、なすすべもなく後ろをとられ、飛ばされる。

武器として昆虫を呼ぶ『昆虫召喚』。それが僕の腕輪の能力。ちなみに攻撃を受けても昆虫は死なない。

『Aクラス 佐藤楓

物理 163点

Aクラス 七伏行平

物理 42点』

起き上がったメーブルが、再び攻撃してくるが、ジャコウアゲハで防ぐ。

その間に行平にトドメをさすため肉薄する。

だがその瞬間行平は銃身を持ち、ボウガンを振り回してきた。

それを左手で受け流し、懷に潜り込む。クローを突き刺すことに成功するが、最後にカウンターとして蹴りを入れられた。

『Fクラス 七伏博人

物理 231点』

蹴りによって少し宙に浮いたところにジャコウアゲハを振り払ったメープルが上から刀を振り下ろしてくる。

かろうじて防御に成功するが、無理な体勢な上にそのまま地面に叩きつけられてしまう。

「来い、キイロスズメバチ」

もう一度腕輪をつかい、キイロスズメバチで追撃を防ぐ。

『Fクラス 七伏博人

物理 146点』

体制を立て直し、キイロスズメバチと共に攻撃をする。

メープルは盾で攻撃を防ぎ続けるが、腕をキイロスズメバチに噛まれ動きが阻害される。

止まったところに勢いをつけ、全力で攻撃を叩きつける。

『Aクラス 佐藤楓

物理 0点』

これでFクラスの一勝目が決まった。

第十四問

第十四問

Aクラスの中でもトップクラスに対して三対一での勝利。

このことでFクラスの志気は最高潮に達していた。

「流石だな、博人」

「お褒めにあずがり光栄です、代表」

待機場所で迎えてくれた雄二とハイタッチする。

「よくやった♪さっすが博君!」

観戦していた秋音姉が頭をなでてくる。

「では、次の方どうぞ」

「私が出ます。科目は物理でお願いします」

Aクラスからは佐藤美穂さん。

「よし。頼んだぞ、明久」

「え!?! 僕!?!」

Fクラスからは明久が出るようだ。

「大丈夫だ。俺はお前を信じている」

自信たっぷりの雄二の言葉。

やっぱり明久が負けることを信じているんだろうな。

というかいまだに頭を撫でられているのは何故だろう。

「そろそろやめて?」

秋音姉は中学生と言われても納得できる容姿と身長だ。それに頭を撫でられているというのはどうも良くない。

「この撫で心地はやめられない、止まらない」

むう、撫でられると少し気持ちいいから困る。

「あれ、気づいた? ご名答。今までの僕は全然本気なんて出しちゃあいない」

おや、明久がまだくだらない戯言を言っているようだ。

処刑準備しておくか……。

「それじゃ、あなたは……!」

なんでこんな嘘を信じるんだろう？

「そうさ。君の想像通りだよ。今まで隠してきたけれど、実は僕――」

大きく息を吸ってこの場にいる皆に告げてきた。

「――左利きなんだ」

『Aクラス 佐藤美穂

物理 389点

VS

Fクラス 吉井明久

物理 62点』

一瞬で勝負が終わった。

「人がせっかく上げた志気をどうしてくれるのかな？」

「か、関節が！ 関節がああああ！」

ついでに頸動脈を絞めて意識を刈り取っておく。

「よし。勝負はここからだ」

「そうだね。これからが本番だよ」

「では、三人目の方どうぞ」

「……………（スック）」

ムッツリーニが立ち上がる。

科目選択権のある今回は圧倒的にこちらが有利だ。

「じゃ、僕が行こうかな」

対してAクラスからは工藤愛子さん。ショートカットの髪の毛のボーイッシュな女子だ。

「一年の終わりに転校してきた工藤 愛子です。よろしくね」

「科目はなににしますか？」

「………保健体育」

ムッツリーニの唯一にして最強の武器が選択される。

「土屋君だっけ？随分と保健体育が得意みたいだね？」

転校生って言っていたから、ムッツリーニの力を理解していないのだろうか？」

「でもボクだってかなり得意なんだよ？……キミとは違って、実技で、ね？」

実技？それってやっぱり怪我の治療とか？

「そっちのキミ、吉井君だっけ？勉強苦手そうだし、保健体育でよかったらボクが教えてあげようか？もちろん実技で」

「フッ。望むところ————」

「アキには永遠にそんな機会なんて来ないから、保健体育の勉強なんて要らないのよ!」

「そうです! 永遠に必要ありません!」

「……………」

「島田に姫路。明久が死ぬほど哀しそうな顔しているんだが」

明久はいつの間に復活したんだろう。

「そろそろ召喚を開始してください」

「はい。試獣召喚っ」と

「……………試獣召喚」

二人に似た召喚獣がそれぞれ武器を持って現れる。ムツツリーニは小太刀の二刀流。そして工藤さんは、

「なんだあの巨大な斧は!?!」

見るからに破壊力満点の巨大な斧。おまけに腕輪を装備している。

『Aクラス 工藤愛子

保健体育 446点

VS

Fクラス 土屋康太
保健体育 572点』

しかし点数ではムツツリーニのが上、腕輪も両方が付けているので、点数で劣っている工藤さんの方が不利だろう。

「こ、こうなったら……（ピラッ）」

「……………！（ブシャアアア）」

何だ！？何が起こったんだ？いきなりムツツリーニから鼻血が間欠泉のように吹き出したよ！？

ムツツリーニが鼻血で倒れている間に、工藤さんはムツツリーニの召喚獣を倒した。

……………この勝負は一体何だったのだろうか。

第十五問

第十五問

「これで二体一ですね。次の方は？」

「あ、は、はいっ。私ですっ」

こちらから出るのは、当然姫路さんだ。

今、Aクラスと真っ向から戦えるのは彼女のみだ。

「それなら僕が相手しよう」

Aクラスから出てきたのは学年次席の久保利光君。

「やはり来たか、学年次席」

姫路さんに次ぐ学年トップクラスの實力の持ち主である。

明久のことが好きな同性愛者という話も聞くが、気にしないでおう。

「ここが一番の心配どころだ」

雄二が心配するのは、姫路さんと久保君の実力がほぼ互角だからだ。

互角の戦いでは、負ける可能性も大ということだ。

「科目はどうしますか？」

雄二が科目選択をするので、今回こちらは科目選択をできない。

「総合科目でお願いします」

総合科目。科目を選べるなら、自分の得意なものを選ぶのは定石だが、久保君はここで実力をハッキリさせたいと思っているのだろうか。

「それでは……」

「「試獣召喚っ！」」

『Aクラス 久保利光

総合科目 3997点

VS

Fクラス 姫路瑞希

総合科目 4409点』

決着は一瞬でついた。

『マ、マジか!?!』

『いつの間にこんな実力を!?!』

『この点数、霧島翔子に匹敵するぞ……!』

至る所から声があがる。

点数差が400点オーバーなのだから無理も無い。

「ぐっ……! 姫路さん、どうやってそんなに強くなったんだ……?」

「……私、このクラスの皆が好きなんです。人の為に一生懸命な皆のいる、Fクラスが」

「Fクラスが好き?」

「はい。だから、頑張れるんです」

まあ、人の（不幸）の為に行動するのはよく見かけるね。

「これで二対二です」

高橋先生にも若干変化が見られた。FクラスがAクラスと渡り合っていることに戸惑っているのだろうか?

「最後の一人、どうぞ」

「……はい」

Aクラスからは代表の霧島翔子さん。

対するこちらからは当然、

「俺の出番だな」

Fクラス代表、坂本雄二だ。ここまでは作戦通り。

「教科はどうしますか？」

霧島さんが負けるわけないと思っているのか、Aクラスの皆は特に騒いでいない。

深く考えれば危機的状況だと思うけど。

「教科は日本史、内容は小学生レベルで方式は百点満点の上限ありだ！」

ざわ……！

雄二の宣言で、Aクラスにざわめきが広がる。

『上限ありだって？』

『しかも小学生レベル、万点確実じゃないか』

『注意力と集中力の勝負になるぞ……』

「わかりました。そうなる問題を用意しなくてははいけませんね。少しこのまま待っていてください」

ノートパソコンを閉じて、高橋女史は教室を出ていく。

その背中を見送り、雄二に近づく。

「最終決戦。頑張って」

「ああ、勝ってみせるさ。」

手を挙げて思いっきりハイタッチする。

「雄二、後は任せたよ」

「ああ、任された」

明久が差し出した手を、雄二はグッと握る。

次にムツツリーニが歩み寄り、ピースサインを雄二に向ける。

「お前の力には随分助けられた。感謝している」

「……………（フツ）」

口の端を軽く上げ、ゆっくりと戻っていく。

「坂本君、あのこと、教えてくれてありがとうございます」

「ああ、明久の事か。気にするな、後は頑張れよ」

「はいっ！」

高橋先生が戻って来て、雄二と霧島さんに声をかける。

そして、決戦の会場へと向かった。

僕はモニターで視聴覚室の様子を見る。

『では、最後の勝負、日本史テストを行います。制限時間は50分、満点は100点です』

画面の向こうで日本史担当の先生が問題用紙を二人の机においた。

『不正行為等は即失格になります。いいですね？』

『……はい』

『わかっているさ』

『では、初めてください』

二人により、問題用紙が表にされる。

そして、ディスプレイに問題が表示される。

平城京、平安京、鎌倉幕府……大化の改新

「あ……！」

「よ、吉井君っ

「うん」

「これで、私たちっ……!!」

「うん！これで、僕らの卓袱台が」

『システムデスクに!!』

Fクラス皆が声を揃える。

「最下層に位置した僕たちの、歴史的な勝利だ!!」

『うおおおおおおお!!!!』

Fクラスの面々が、歓喜の雄たけびを上げた。

しかし、ついさっき重要なことに気づいてしまった。僕は苦笑いしかできない。

（あれだけ自信满满だったから忘れてたけど、雄二が百点取れなかったら意味ないよね？）

「あれ？どうしたの博人？せっかくの勝利なんだから、もっと喜ぼうよ」

少し変な僕の様子に気づいたのか、明久が声をかけてくる。

「水を差すようで悪いけどさ、雄二はこのテスト百点とれるんかね？」

「ははっ、まさかそんな……」

<日本史勝負 限定テスト 100点満点>

『Aクラス 霧島翔子 97点』

VS

『Fクラス 坂本雄二 53点』

Fクラスの卓袱台が、みかん箱になった。

第十五問（後書き）

あとがき

感想、ご意見等ありましたら、お願いします。
お気に入り登録や評価もよろしくお願いします。

第十六問

第十六問

「三対二で、Aクラスの勝利です」

視聴覚室になだれ込んだFクラスの面々に対する高橋先生の締め
言葉。

まさかこんなことが予想通りになってしまうとは……

「……雄二、私の勝ち」

床に膝をつく雄二に霧島さんが歩み寄る。

「……殺せ」

「良い覚悟だ、殺してやる！ 齒を食い縛れ！」

雄二に制裁を加えようとしている明久にあるものを渡す。

「はい、ナイフ」

別に殺傷用ではなく、いざという時の十徳ナイフだ。

「吉井君、落ちついてください！」

ナイフを受け取ろうとした明久に姫路さんが後ろから抱きついた。

「だいたい、53点ってなんだよ！0点なら名前の書き忘れとかも考えられるのに、この点数だと――」

「いかにも俺の全力だ」

「この阿呆がぁーっ！」

「アキ、落ち着きなさい！ アンタだったら、30点も取れないでしょうが！」

「それについては否定しない！」

「もしくは『否定できない』、だね」

「それなら、坂本君を責めちゃダメですっ！」

「くっ！と何故止めるんだ姫路さんに美波！ この馬鹿には喉笛を斬り裂くと言う体罰が必要なのに！！」

「それって体罰じゃなく処刑です！」

「明久、ナイフは使い終わったら返してね。明久も負けたんだから同罪だし」

「ドンマイ雄二！気にするな！」

切り替え速いな。

「…………でも、危なかった。雄二が所詮小学校の問題だと油断していなければ負けていた」

「言い訳はしねえ」

つまり凶星だと。

「…………ところで、約束」

「……………！（カチャカチャカチャ！）」

霧島さんの言葉で、突然ムツリーニと明久が撮影準備を始めた。

そういえば僕もメーブルと約束してたな。どんな要求なのだろう。

「…………それじゃー」

霧島さんは小さく息を吸って、

「…………雄二、私と付き合って」

言い放った。

「やっぱりな。お前、まだ諦めてなかったのか」

「私は諦めない。ずっと、雄二のことが好き」

「その話は何度も断っただろ？他の男と付き合う気はないのか？」

「……私には雄二しかない。他の人なんて、興味ない」

「拒否権は？」

「……ない。約束だから。今からデートに行く」

「ぐあっ！放せ！やっぱこの約束はなかったことにー」

ぐいっ　つかつかつか

霧島さんは雄二の首根っこを掴んで教室を出て行った。

「……………」

「……………」

「……………」

しばしの沈黙が教室に訪れた。

今の出来事に言葉が出ないようだ。

「さて、Fクラスの諸君、お遊びの時間は終わりだ」

それを破ったのは、とある教師の声。

「あれ？　西村先生。僕らに何か用ですか？」

「ああ。今から我がFクラスに補習についての説明をしようと思っ
てな」

『我が』Fクラス、ということは――

「西村先生。もしかして担任が福原先生（現担任）から西村先生に変わるんですか？」

「そのとおりだ。良かったな、お前ら。これから一年、死に物狂いで勉強できるぞ」

『なに！？』

クラスの男子生徒から悲鳴があがる。

「いいか。確かにお前らはよくやった。Fクラスがここまで来るとは正直思わなかった。でもな、いくら『学力が全てではない』と言っても、人生を渡っていく上では強力な武器の一つなんだ。全てじゃないからと言って、ないがしろにしているものじゃない」

負けた僕達には言い返す言葉もない。

「吉井。お前と坂本は特に念入りに監視してやる。何せ開校以来初の《観察処分者》とA級戦犯だからな」

「そうはいきませんよ！　なんとしても監視の目をかいくぐって、今まで通りの楽しい学園生活を過ごしてみせます！」

「……お前には、悔い改めるといふ発想はないのか」

明久はああ言っているが、実際は次の試召戦争に向けて勉強する気だろう。

「とりあえず明日から授業とは別に補習の時間を二時間設けてやろう」

放課後こそ学園生活を最も満喫できる時間なのに……。

それに、もし休日まで補習を入れられたら、昆虫採集の時間が減るじゃないか！

こうして、僕らの最初の試召戦争は憂鬱を残して終わった。

第十七問

第十七問

戦争が終わった日の、七伏家。

リビングに、僕、行平、メープルが集まっていた。

「いや、楽しかったね試召戦争」

「うん。いろいろあったけど、本当に楽しかったよ」

「そうですね。本気で戦うというのは気分の良いものです」

あ、そういえば――

「メープル、あの約束は？」

「私の言うことを聞いてくれるんだよね？」

「賭は僕の負けだからね」

「それじゃあ、今から私が言うことに、逃げないで、正直に伝えてそれがお願い」

それぐらいならおやすいご用だと、首を縦にふる。

「あのね………私はハクのことを、小さい頃から好きだったの。だから、付き合っ^てほしいのだけ^ど」

………え？

好き？あの可愛くて綺麗で明るくて優しく^て勉強もできる通称メープルこと佐藤楓が僕のことを？

……ハッ！少しトンでしまった。

これに逃げずに正直に^こえる。それが僕のとる行動。

少し息を吸^って、答える。

「僕も、小さい頃から、メーブルのことが好きだったー^ーと思う」

「『思う』？」

「自分のことは良くわからないからね。けど、僕はメーブルのことが好きだといえる」

「そう。それじゃ、その思いを確信にしてあげる」

そうい^って、僕の前^に来て唇を合^わせてきた。

「それじゃあ、また明日。ユキ、それと私の恋人さん♪」

メーブルはそういい残^して、去^ってい^った。

ちなみにユキとは行平のことだ。

その後5分間僕は顔を真っ赤にしたまま、唇に手を当てたまま動けなかった。

ちなみにその日は危なかしくて任せられないということで台所から追い出された。

設定？

設定？

『七伏博人』（ななふしはくと）

身長161cm 幼い顔立ちなので、小さい印象を受ける
得意科目…理数系、特に生物が飛び抜けている。

趣味…昆虫採集、科学系の本の読書

特技…運動全般（人並み以上）、記憶、ポーカー

好きな物（事）…昆虫、甘いもの、疑う事、科学、難しい事
嫌いな物（事）…苦い物、信じる事

召喚獣…クロー、足の鉤爪、肘のブレードが武器。

防具は脛のアーマーのみ。

腕輪は『昆虫召喚』で、武器として昆虫を召喚

し、自由に操る。

その他…周りを気にせず我が道を行く。『信じるよりも疑う方が確実に真実にたどり着ける』という。『昆虫少年』や『速攻』の二つ名がある。折りたたみ式の捕虫網を常時装備。

『佐藤楓』（さとうかえで）通称メープル

身長…159cm

得意科目…国語、英語

趣味…読書、折り紙

特技…速読、細かい作業

好きな物（事）…文学、よく考える事、博人
嫌いな物（事）…付和雷同

召喚獣…着物（防御力高）、盾、刀
その他…瑞希ほどではないが、スタイルが良く、人気がある。『くっす』という口調はキャラ作り。結構な策士。博人を逃げられなくするように、日々策を練っている。

『七伏行平』（ななふしゆきひら）

身長…178cm 博人とは反対で大人びた印象を受ける。

得意科目…社会系

趣味…散歩、旅行

特技…投擲、弱点探し

好きな物（事）…歴史や文化、面白い物

嫌いな物（事）…平穩すぎることに

召喚獣…スーツとシルクハットを装備し、ライトボウガンが武器。

その他…博人の双子の兄。丁寧な口調に反して、弄るのが好きなSの人。面倒見がよく、好かれやすい。

『杉本秋音』（すぎもとあきね）

身長141cm 中学生のような容姿

趣味…物体の運動観察

特技…球技、暗算

好きな物（事）…科学、のんびりする事

嫌いな物（事）…面倒事

召喚獣…白衣にツインチェンソー

その他…二年Fクラスの副担任。小さい身長に対してスタイルは良い。のほほんとした雰囲気。

く僕とメーブルと殲滅戦く（前書き）

今回は短編です。

く僕とメーブルと殲滅戦く

短編く僕とメーブルと殲滅戦く

明久がラブレターを貰うという騒動の翌日、僕はいつも通り三人で登校していた。

「ところで、お二人はどうですか？どこまで行きました？」

「ぶっ……………なんてことを聞くんだけ」

「まだキスだけという残念な感じ」

「おや、残念。良い感じでいじれるかと思ったのですが」

そんなとき、僕達の話聞ける距離に誰かの足音が聞こえた。

「あれ、雄二。おはよう」

その人物は、Fクラス代表坂本雄二だった。

「雄二君じゃないっすか。おはようっす」

メーブルは他の人が来たので、『くっす』という口調になっていた。

その後雄二も交えて雑談しながら学校へと向かった。

「工藤」「はい」「久保」「はい」

毎朝の恒例行事の出席確認。

「近藤」「はい」「斉藤」「はい」

いつも騒がしい教室にのどかなひとときが訪れている。

今日は平穏に過ごせー

「坂本」「……………博人が佐藤楓と付き合い始めたようだ」

『殺せええっ!!』

そうもなかった。

「やっぱり聞いていたんだね、雄二」

あのときもつと速く雄二の気配に気づくべきだった。

『以前からイチャイチャしてやがったが、付き合い始めるなんて』

『これはもう殺すしかないな』

『弁明の余地はないな』

「手塚」「七伏クロス」「藤堂」「七伏クロス」

「返事は『はい』だ！」

西村先生が殺意をこめた返事をした奴らを注意する。

「ちょっと待って先生！昨日はそんなこと言わなかったよね！」

昨日明久はまったく同じ展開になったが、そこは生活態度の差だろう。

出席確認が終わり、西村先生が出席簿を閉じる。

「よし。遅刻欠席はなしだな。今日も一日勉学に励むように」

教室を出て行く西村先生に、後ろからついていく。

西村先生のいる状態では手が出せないのか、Fクラスの連中も攻撃してこなかった。

そのまま職員室前まで行き、次の授業の先生と一緒に教室に入った。

そんなことを繰り返してなんとか昼休みまで逃げ切った。

時間はたっぷりあるので、殲滅を開始する。

「見つけたぞ！誰か応援にぶっへっ！」

早速一人目が来てくれたので、注意がそれた隙に足を払い転ばせる。

手足を縛ってから西村先生に連絡し、補習室に送る。

「いたぞ！ B部隊に連絡して挟み撃ちにするぞ！」

昨日と同じく部隊編成までしている。

少し厄介なので、ダッシュして逃げる。

僕を追うためにバラバラになった奴らを一人ずつ縄で縛り、補習室に送ってやる。

これで雑魚は殲滅完了。

そんな時、いやな気配を感じて横に動くとしさっきまで立っていた場所にペンが刺さっていた。

「……………裏切り者には、死を」

文房具を手にもってこちらを狙っているのは、ムツツリーニ。動きが素早いので、敵の中では一番厄介だ。

「いくよ、ムツツリーニ」

「……………次はカッターを投げる」

脅迫は気にせずつつこんでいくと、宣言通りカッターを投げってくるが、刃が出ていないので手で弾く。ムツツリーニが次の行動に移る前に足払いをして、転ばせてから縛りあげる。

昼食をゆっくり食べるため、早めに殲滅することにし、敵を探していると木刀を持った須川がいた。

「ここまでだ、七伏！」

「うっさい速くくたばれ」

腰から取り出した捕虫網の柄で須川の木刀を弾き飛ばし、やっぱり足払いで転ばせてから縛る。

「ぐふう！」

丁度良くバカが現れたので、何か言う前に潰した。

これで残るは後一人、坂本雄二だ。

これは一番簡単に始末できるので、わざと最後に回した。

携帯電話を取り出し、ある人物にかける。

「あ、もしもし。霧島さん？雄二が霧島さんと昼食を食べたいんだって。恥ずかしがり屋だから霧島さんから迎えに言ってあげて」

はい終了。

「ハク！大丈夫だったすか？」

「いやはや、面倒なことになりましたね」

丁度メープルたちと合流できたので、昼食を食べるために、Aクラスに向かう。

メーブルとの関係がばれたのは予想外だったけど、これはこれでいいんじゃないかな。

第十八問

第十八問

とある日の七伏家。

居候である杉本秋音が、僕、行平、メープルをリビングに集めた。

「皆さんには重大な話があります」

「一体何ですか？」

行平が聞くと、秋音姉が自信満々に答えた。

「いやあ、実は私ね、試験召喚システムの腕輪の開発を手伝ったの。そこで、清涼祭の『召喚大会』の賞品として学園長の作った『白金の腕輪』とは別に『黄金^{こがね}の腕輪』っていうのを作っただけど、欠陥があっただけ」

「それで、欠陥はどんなものなの？」

暴走が起きたりするのだろうか？

「500点以下の点数で使うと99, 5%の点数を失っちゃうんだよ♪」

「酷すぎる!」

たとえ400点とっても、使った瞬間2点になるとか不良品すぎだ。

「というわけで、君たちには私のミスをもみ消して欲しいのだ♪」

「今さらって大人の事情を言いましたね」

失敗の隠蔽とかなんてことを頼むんだこの人は。

「君たちなら、得意科目はよゆーで500点突破してるもんね」

「その依頼の私達メリットは？」

そうメーブルが聞くと、フッフッフと笑ってから、

「優勝者には『如月ハイランド』のペアチケット二枚が進呈されちゃいます!」

「絶対やってみせる」

メーブルは即答していた。

「え? どうしたのそんな急に?」

「博人、つまりこういうことです。メーブルは博人と如月ハイランドでデートがしたい、と」

「ほえ? そんな……」

「まったく、博人は恋愛話の弱すぎです。反応が面白すぎて弄りたくなってしまうがありません」

最近は恋愛話の話になると赤面したり言葉がでなくなることで、頻繁に行平にいじられている。

行平は丁寧な口調とは裏腹に、弄るのが好きなSなのだ。

「ちなみに、企業側が訪れたカップルを無理やり結婚させようとしてるって噂もあるよ」

「これはもう受けるしかないわ。この依頼」

結婚……かあ。

「さて、博人が処理落ちしかけていますが、召喚大会はペア出場ですよね？どう組み合わせるんですか？」

「私としては、近接型の博君と、遠距離型の行君のペアが良いと思うな」

「それじゃあ私は他の人を誘ってみる」

どうやら、方針は決定したようだ。

「んじゃ、これで解散！」

こうして召喚大会の出場が決定した。

……その後いろいろ面倒事を押しつけられたけど。

第十八問（後書き）

あとがき

感想、ご意見等ありましたら、お願いします。
お気に入り登録や評価もよろしくお願いします。

第十九問

第十九問

新学年になって最初の行事である『清涼祭』。

そして今は、その準備の為のLHRの時間。

どの教室も活気づいているのだが……。

『吉井！こいつ！』

『勝負だ、須川君！』

『お前の球なんか、場外まで飛ばしてやる！』

我がFクラスのほとんどの生徒は野球をしていた。

さっき西村先生が連れ戻しに行ったからじきに戻ってくるだろう。

ちなみに僕は秋音姉に任された清涼祭のパンフレットのレイアウトを考えている。

「さて、そろそろ春の学園祭、『清涼祭』の出し物を決めなくちゃいけない時期が来たんだが――」

野球を中断して戻って来た雄二はだるそうにござの上に座っている僕達を見下ろしながら宣言した。

「とりあえず、議事進行並びに実行委員として誰かを任命する。そいつに全権を委ねるので、後は任せた」

ふむ、要約すると『俺はやる気ないから、誰かやっといてくんね？』ってことだね。

「んじゃ、学園祭実行委員は島田ということでもいいか？」

「え？　ウチがやるの？　うゝん……、ウチは召喚大会に出るから、ちょっと困るかな」

「雄二。実行委員なら、美波より姫路さんとか博人の方が適任なんじゃないの？」

「え？　私ですか？」

「姫路には無料だな。多分全員の意見を丁寧に聞いているうちにタムアップになる」

少数派の意見を切り捨てられない姫路さんでは時間がかかりすぎる。雄二はその辺のことを雄考えて島田さんに任されたのだろう。

僕は杉本先生からの仕事が入っていて忙しいから無理。

その存在を示すためトントンとミカン箱（超補強）の上の紙を叩く。

「それにね、アキ。瑞希も召喚大会に出るのよ」

「え？ そうなの？」

「はい。美波ちゃんと組んで出場するつもりなんです」

「あ、ちなみに僕も」

「学校の宣伝みたいな行事なのに。三人とも物好きだなあ」

召喚大会は、ぶっちゃけると試験召喚システムのPR企画だ。

「ウチは瑞希に誘われてなんだけどね。瑞希ってば、お父さんを見返したいって言ってきかないんだから」

「お父さんを見返す？」

「うん。家で色々言われたんだって。『Fクラスのことをバカにされたんです！ 許せません！』って怒ってるの」

「あらら。姫路さんが怒るなんて珍しいね」

「だって、皆のことを何もわかっていないくせに、Fクラスっていう理由だけで バカにするんですよ？ 許せませんっ」

「……………」

Fクラスをよく知っているからこそ言える事がある。

このクラスはバカばかりだ。

「僕は賞品の腕輪目当てかな？」

「あー、4人とも、こっちの話を続けていいか？」

「あ、ゴメン雄二。美波が実行委員になる話だったよね？」

「だからウチは召喚大会に出るって言ってるのに」

「なら、サポートとして副実行委員を選出しよう。それなら良いだろう？」

チラッと雄二は明久の方を見た。

なるほど。明久を生け贄にするつもりか。

「んゝ…………。そうね、その副実行委員次第でやってもいいけど…………」

「そうか。では、まず皆に副実行委員の候補を挙げてもらう。その中から島田が二人を選んで決戦投票したらいいだろう」

皆もいいな、とクラスメイトに告げると、ちらほらと推薦の声が聞こえてきた。

『吉井が適任だと思う』

『やはり坂本がやるべきじゃないか？』

『いや、七伏のほうがいいだろう』

『姫路さんと結婚したい』

『ここは須川にやってもらった方が』

一回変なの混じってたな。

「ワシは明久が適任じゃと思うがの」

秀吉が明久に一票投じてくれる。

「秀吉。僕もそういう面倒な役は、できればパスしたいな〜なんて」

ここでたたみかけて納得させてしまおう。

「それは他の皆も同意見だよ。それだったら適任の人にやってもらったほうが良いと思うよね？」

「むう……。それはそうだけど……」

島田さんのサポートなんだから、明久以外の適任がいるはずはなからう。

「よし。じゃあ島田。今挙がった連中から二人を選んでくれ」

「そうね〜。それじゃ……」

ある程度候補の名前が挙がったところで、島田さんはボロボロの黒

板に候補者の名前を書き連ねた。

『候補？……吉井』

予想通り明久だ。

『候補？……明久』

こっちも明久だ。

それにしても斬新な候補の挙げ方だ。

「さて、この二人のどちらが良いか、選んでくれ」

「ねえ雄二。明らかに美波の候補の挙げ方はおかしいと思わない？」

そこは気にしても無駄なんだよ、明久。

『どうする？どっちが良いと思う？』

『そうだなあ……。どちらもクズには変わらないんだが……』

「こらあっ！真面目に悩んでいるフリをするんじゃない！あと、平然とクラスメイトをクズ呼ばわりするなんて、君らは人間のクズだ！」

それを言ったら明久もクズになると思うんだけど。

まあ結局明久が副実行委員になり、壇上にあがった。

「んじゃ、あとは任せたぞ。ふあゝ……」

入れ替わりに席に戻る雄二だが、欠伸をこらえる気もなくダルいオ
ーラを纏っていた。

「ウチは議事進行をやるから、アキは板書をお願いね」

「ん。了解」

第二十問

第二十問

「それじゃ、ちゃっちゃと決めるわよ。クラスの出し物でやりたいものがあれば挙手してもらえる？」

島田さんが言うと、何人かが手を挙げた。

少し位やる気のある人はいるようだ。

「はい、土屋」

「……………（スクツ）」

名前を呼ばれてムツツリーニが立ちあがる。

「……………写真館」

「…………土屋の言う写真館って、かなり危険な予感がするんだけど」

僕も同意見だ。裏で写真の売買が行われるのは必至だろう。

「アキ、一応意見だから黒板に書いてもらえる」

「あいよー」

【候補？写真館『秘密の覗き部屋』】

黒板に書かれた候補には、謎な名前がつけられていた。

「次。はい、横溝」

「メイド喫茶ー」と言いたいけど、流石に使い古されていると思うので、ここは斬新にウェディング喫茶を提案します」

「ウェディング喫茶？それってどういうの？」

「別に普通の喫茶店だけど、ウェイトレスがウェディングドレスを着ているんだ」

ウェイトレスっていつでも、このクラスに女子は二人。秀吉を合わせても三人だけだ。ウェディングドレスを主役に持ってくるのは厳しいだろう。

でも、ウェディングドレスか……………

……………ハッ！結構トリップしてたみたいだ。

慌てて黒板を見ると、候補？が書かれていた。

【候補？ウェディング喫茶『人生の墓場』】

集客力の低そうな名前だな。いや？興味本位で来る客もいるか。

「さて、他に意見はーはい、須川」

「俺は中華喫茶を提案する」

そう言いながら須川は立ち上がった。

「中華喫茶？チャイナドレスでも着せようっていうの？」

「いや、違う。俺の提案する中華喫茶は本格的なウーロン茶と簡単な飲茶を出す店だ。そうやってイロモノ的な格好をして稼ごうってワケじゃない。そもそも、食の起源は中国にあるという言葉があることからわかるように、こと『食べる』という文化に対しては中華ほど奥の深いジャンルはない。近年、ヨーロッパ文化による中華料理の淘汰が世間では見られるが、本来食というものは――」

確かに中華料理は地域差が大きいつて話だから、奥の深いジャンルというのも頷ける。それにしても随分こだわりがあるんだな。

「アキ。それじゃ、須川の意見も黒板に書いてくれる？」

「あ、うん」

明久は返事したのは良いが、話を全く聞いていなかったので、何を書いたら良いのかわからないようだ。

「どうなの？早く書いてよ」

「りよ、了解」

【候補？中華喫茶『ヨーロッパアン』】

頭に残った言葉を適当に書いたようだ。

明久がちょうど書き終えた時に、西村先生と秋音姉が教室に入ってきた。

「皆、清涼祭の出し物は決まったか？」

「今のところ、候補は黒板に書いてある三つです。

黒板に書いてあるのは――

【候補？写真館『秘密の覗き部屋』】

【候補？ウェディング喫茶『人生の墓場』】

【候補？中華喫茶『ヨーロッパ』】

「……補習の時間を倍にした方が良いかもしれんな」

当然の反応といえるが、流石に倍はきつい。

「あゝ、西村先生。『』の中は無視してください」

「それなら妥当なところだな」

ふう、回避成功だ。

「しかし、吉井にこんな大役を任せていいのか？稼ぎを出せば設備を向上させられるぞ？」

溜息混じりの鉄人の声を聞いて、クラスの皆の目が光った。

『そうか！その手があったか！』

『なにも試召戦争だけが設備向上のチャンスじゃないよな！』

『いい加減この設備にも我慢の限界だ！』

一気に教室内が活気づく。ランクが下がる前の設備でさえ不満があったんだ。この設備に不満がないわけがない。

僕も最近はこの教室から避難するためにAクラスに入り浸っている。

「み、皆さんっ！頑張りましょう！」

姫路さんが手を胸の前で握り、立ち上がっていた。

……どうやら色々問題があるようだ。

『出し物はどうする？利潤の多い喫茶店が良いんじゃないか？』

『いや、初期投資の少ない写真館の方が』

『けど、それだと運営委員会の見回りで営業停止処分を受ける可能性もあるぞ』

『中華喫茶ならはずれはないだろう』

『それだと目新しさに欠けるな。汚いせいであまり人が来ない旧校舎だと、その特徴のなさは致命的じゃないか？』

『ウェディング喫茶はどうだ？』

『初期投資が大きすぎる。たった二日間の清涼祭じゃ儲けは出ないんじゃないか』

『リスクが高いからこそリターンも大きいはずだ』

皆がやる気になったのは良いが、あまりにもまとまりが無さすぎる。

「はいはい！ちょっと静かにして！」

島田さんが手を叩いて注意するが、あまり効果はなく、それぞれ好き勝手言っている。

『お化け屋敷とかの方が受けると思う』

『簡単なカジノを作ろう』

『焼きとうもろこしを売ろう』

うーん。これだけまとまりのないクラスをまとめるのは難しいだろうなあ。

それにそろそろ五月蠅くなってきた。

「この中から一つだけ選んで手を挙げて！」

業を煮やした島田さんが決を採りにかかる。

結果は僅差で中華喫茶の勝利だった。

「Fクラスの出し物は中華喫茶にします！全員、協力するように！」

「それなら、お茶と飲茶は俺が引き受けるよ」

「……………（スクツ）」

と、須川とムツツリーニが立ち上がった。

「ムツツリーニ、料理なんてできるの？」

「……………紳士の嗜み」

中華料理が紳士のたしなみなんてのは聞いたことがない。

おそらくチャイナドレスを見るため中華料理店に通っていたら見様見真似でできるようになったのだろう。

まずは厨房班とホール班に分かれてもらうからね。厨房班は須川と土屋のところ、ホール班はアキのところに集まって！」

いつの間にか明久はホール班のトップにされたようだ。

「それじゃ、私はホール班にー」

「ダメだ姫路さん！君はホール班じゃないと！」

平然と厨房に入ろうとした姫路さんを明久が呼び止める。

自覚がないので質が悪い。

『良くやった、明久』

『明久、グッジョブじゃ』

『……………！（コクコク！）』

アイコンタクトで明久の功績を褒め称える。

「え？ 吉井君、どうして私はホールじゃないとダメなんですか？」

本当のことをいうと、料理の腕を向上させるために毎日作ってきたなどというのだろう。死の危険をおさえるためにも、うまくごまかさなくちゃいけない。

「あ、えーっと、ほら、姫路さんは可愛いから、ホールでお客さんに接した方がお店として利益が痛あ”っ！み、美波！僕の背中にはサンドバックじゃないよ！」

「か、可愛いだなんて……。吉井君がそう言うなら、ホールでも頑張りますねっ♪」

「いや、効率的にもホールに専念して」

もってもらしい理由で排除しておく。

「アキ。ウチは厨房にしようかな？」

「うん。適任だと思う」

「……………」

明久、そこは気を使ったほうがいいぞ。

「それなら、ワシも厨房にしようかの」

「秀吉、何をバカなことを言ってるのさ。そんなに可愛いんだから、もちろんホールに決まってみぎゃあっ！み、美波様！折れます！腰骨が！命に関わる大事な骨が！」

本当に学習しないと死ぬぞ、明久。

「……ウチもホールにするわ」

「そ、そうですね……。それが、いいと、思います……」

Fクラスらしく、ドタバタした状態で設備のかかった重要な学園祭が幕を開けた。

第二十二問

第二十一問

『……賞品の……として隠し……』

『……こそ……勝手に……如月ハイランドに……』

『失礼しまーす！』

『……当に失礼……どもだね……返事を待つ……』

『やれやれ……だというのに……ですね……話を続け……差し金
ですか？』

『……言わないでくれ……このアタシが……手を使わなきゃ……
のさ。……ないというのに』

『……だか。学園長……隠し事が……ですから』

『……言っているように……なんて無いね……違いだよ』

『…………ですか。……否定される……そういうことに……ましょ
う』

『……では、この場……させていただきます』

教頭の竹原が踵を返して学園長室を出て行くのを確認する。

「ふう。疲れた」

「まったく、ねちっこい男は嫌なものね」

そう言って、学園長室の『本棚の下の書類を入れるスペース』から秋音姉と共に出てくる。

「……………」

「……………」

そして、学園長室にいた明久と雄二と目があつた。

「あれ？どうしたの二人とも」

「学園長に何か用事？」

「さっさと用件をいいな、ガキども」

平静を装いつつ話題を変える。学園長との連携も完璧だ。

「今日は学園長にお話があつて来ました」

僕たちの連携に流され、用件を話し始める雄二。

「私は今それどころじゃないんでね。学園の経営に関することなら、教頭の竹原に言いな。それと、まずは名前を名乗るのが社会の礼儀ってモンだ。覚えておきな」

学園長が礼儀知らずなので、説得力はない。

「失礼しました。俺は二年F組代表の坂本雄二。それでこっちが――」

雄二が明久を指差し紹介する。

「――二年生を代表するバカです」

随分わかりやすい説明だね。

「ほう……。そうかい。アンタたちがFクラスの坂本と吉井かい」

「ちょっと待って学園長！僕はまだ名前を言っていないませんよね！？」

明久といえばバカ。バカといえば明久なのは誰でも知っている。

「気が変わったよ。話を聞いてやろうじゃないか」

映画の悪役のように口の端を吊り上げて笑う学園長。少し妖怪っぽい。

「ありがとうございます」

「礼なんか言う暇があったらさっさと話しな、ウスノロ」

「わかりました」

今のところ雄二は敬語を保っているけど、崩れるのは時間の問題だ

ろう。

「Fクラスの設備について改善を要求してきました」

「そうかい。それは暇そうで羨ましいことだね」

「今のFクラスの教室は、まるで学園長の脳みそのように穴だらけで、隙間風が吹き込んでくるような酷い状態です」

やっぱり予想通りだった。

「学園長のように戦国時代から生きている老いぼれはともかく、今の普通の高校生にこの状態は危険です。健康に害を及ぼす可能性が非常に高いと思われます」

丁寧な口調を崩さず、危険な言葉をちりばめていた。これでお願いに来ているというのだから驚きだ。

「要するに、隙間風の吹き込むような教室のせいで体調を崩す生徒が出てくるから、さっさと直せクソババア、というワケです」

そんな雄二の説明を受けて、学園長は思案顔をしていた。

何度か話に出てきた体調を崩す生徒ってのは姫路さんのことだろう。おそらく、このままの教室の設備じゃ転校することになるのだろうな。

「あの、学園長……?」

明久が雄二の発言に学園長が機嫌を損ねたのではないかと心配そう

に発言する。

「……ふむ、丁度いいタイミングさね……」

学園長は小声でそう呟いた。どうやら面倒事をやらせるつもりのようにうだ。

「よしよし。お前たちの言いたいことはよくわかった」

「え？それじゃ、直してもらえるんですね！」

姫路さんの転校が関わっている以上、明久も真剣なようだ。

「却下だね」

「雄二、このババアをコンクリに詰めて捨ててこよう」

「……明久。もう少し態度には気を遣え」

雄二がそれを言うのは間違いだ。

と、そんなときに肩をトントンと叩かれる。

（どうしたの秋音姉？）

（もしかして学園長はあの二人に『白金の腕輪』を任せるつもりなの？）

（準優勝の可能性がある低得点者だからね）。丁度いいんじゃない？）

（学園長はひねくれてるから欠陥を正直に話さないだろうね）

白金の腕輪には欠陥がある。

それは、高得点者が使うと暴走するというものだ。

（そう言えばこの部屋の盗聴器は？）

（竹原が仕掛けたのは全部破壊しちゃったよん♪）

雄二たちは学園長と取引をしているが、それを妨害するであろう竹原に情報が伝わらないのは良いことだ。

（そろそろ取引が終わったみたいよ）

「それじゃ、ボウズども。任せたよ」

「「おうよっ！」」

教室の改修との交換条件を引き受け、話は決まったようだ。

「……………ところでなんで、博人はあんなところから出てきたの？」

明久がさっきからずっと思っていた疑問をやっと口にしたようだ。

『黄金の腕輪』の欠陥は言えないことなので、誤魔化す。

「変な噂のあるチケットを勝ち取ってくれてという学園長からのお願いを聞いたただだよ」

「それじゃ、僕達と同じだね」

明久は気づいてないだろうが腕輪が本当の目的ってところもおなじだ。

雄二は薄々気づいているようだが。

まあ、当日にならなきゃ詳しいことは気づかれないだろう。

第二十二問

第二十二問

「いつもはただのバカに見えるけど、坂本の統率力は凄いわね」

「ホント、いつもはただのバカなのにね」

「それはお前たちが言えることじゃないけど」

「そうっすよ」

清涼祭初日の朝。

いつもの汚い教室は、中華風の喫茶店へと姿を変えていた。

「このテーブルなんて、パツと見は本物と区別がつかないよ」

教室内に設置されているテーブルは、最初はクラスのみかん箱を使うつもりだったが、時間が余った僕が木材で作ったテーブルを使っている。

「あ、それは七伏君が作ったテーブルに、木下君が綺麗なクロスを持ってきて、手際よく作ってくれたんですよ」

クロスの布は演劇部で使っている小道具なので、なかなか良さそう

な生地だ。

「うーん、ハクはさすがっすね」

なぜAクラスのメープルがここにいるかという点、霧島さんに頼んでFクラスの手伝いをする許可をもらったそうだ。

もちろんAクラスの宣伝もしている。

「時間がなくてニスは塗れなかったけどね」

いつの間にかムッツリーニが胡麻団子をもって近くに来ていた。

「……………飲茶も完璧」

「おわっ」

ムッツリーニは気配が薄いので、明久はいきなり現れたように思えて驚いてた。

「ムッツリーニ、厨房の方もオーケー？」

「……………味見用」

そうやってムッツリーニは手に持っていた。胡麻団子を差し出した。きた。

「わぁ……。美味しそう……」

「土屋、これウチらが食べちゃっていいの？」

「……………（コクリ）」

「では、遠慮なく頂こうかの」

「いただきます」

秀吉達と一緒にお盆の上の胡麻団子を手取る。

「お、美味しいです！」

「本当！表面はカリカリで中はモチモチで食感も良いし！」

「甘すぎないところも良いのう」

「……………（モグモグ）」

「ハクも満足してるみたいっす」

僕の中では甘い＝うまいが成り立つ。

よってこれは甘い（うまい）。

「お茶も美味しいです。幸せ……」

「本当ね……」

「ハク、食べかけで良いならこれ食べるっすか？」

「もちろん」

すると、口のまえに胡麻団子が差し出される。

「はい、あーんっす」

「……………（パク）」

かなり恥ずかしいので無言で食べる。

周りから強烈な殺気を感じるが睨みつけたらある程度緩和された。

一人で殲滅したのがこんなところで役に立ったようだ。

「うーっす。戻ってきたぞー」

と、そんなところに雄二が戻ってきた。

「あ、雄二。お帰り」

「喫茶店はいつでもいけるな？」

「無論だよ」

「よし。少しの間、喫茶店は秀吉とムツツリーニに任せる。俺は明久と召喚大会の一回戦を済ませてくるからな」

「あれ？アンタたちも召喚大会に出るの？」

「え？あ、うん。色々あってね」

学園長から出場理由についての口止めはされているので、下手なことは言えない。

「もしかして、賞品が目的とか……？」

「うーん。一応そういうことになるかな」

詳しく言うと、賞品と設備の交換が目的だね。

「……誰と行くつもり？」

「ほえ？」

島田さんの目が細くなった。これは攻撃色だ。

「吉井君。私も知りたいです。誰と行こうと思っていたんですか？」

気がつくとも姫路さんも戦闘モード。

「だ、誰と行くって言われても……」

「明久は俺と行くつもりなんだ」

明久が返答に迷っていると、雄二が助け船？を出した。

「え？坂本とペアチケットで『幸せになりに』行くの……？」

「俺は何度も断っているんだがな」

助け船というよりは明久を追い詰めたかったただけだな。

「アキ。アンタやっぱり、木下よりも坂本の方が……」

「ちょっと待って！その『やっぱり』って言葉は凄く引かかる！それと秀吉！少しでも寂しそうな表情をしないでよ！」

このままこの誤解が広まると明久は同性愛の似合いそうな人ランキングが上がることになるのだろう。

「吉井君。男の子なんですから、できれば女の子に興味を持った方が……」

「それができれば明久だって苦労はしていないさ」

「雄二、もっともらしくそんなことを言わないで！全然フォローになってないから！」

「つと、そろそろ時間だ。行くぞ明久」

「……くっ！と、とにかく、誤解だからね！」

自分の意見を真っ向から無視される明久を見て、僕はある決心をした。

明久の幸せをサポートしてやろう。さすがに不憫すぎる。

それはともかく、僕もそろそろ試合なので行平と合流するため教室を出る。

第二十三問

第二十三問

「えー。それでは、試験召喚大会一回戦を始めます」

校庭に作られた特設ステージで、召喚大会は催される。

僕達のBブロックは、立ち会いの先生の関係上、明久達のDブロックとは科目が異なる。

僕達の一回戦は英語。行平も僕も得意科目ではない。

「では、召喚してください」

「」「」「試獣召喚」「」

さて、こらへんで僕達の召喚大会の目的を整理しておこう。

まず、僕達の目的は優勝賞品の『黄金の腕輪』。

腕輪の能力は召喚フィールド作成と、特殊能力『攻撃追加』と『滑走移動』だそうだ。

フィールド作成をするには500点以上必要だが、特殊能力の使用には400点あれば問題ないらしい。

次に、明久達を準優勝させなくてはいけない。学園長の作った『白金の腕輪』は高得点者が使うと暴走してしまう。腕輪を使っても暴走しない準優勝することのできる低得点者、それが明久達。

つまり、明久達とは決勝以外で当たることはない。

明久は準優勝との交換条件で、姫路さんの転校を防ぐことが本当の目的だが、僕にとってはどうでも良いことなので、とにかく優勝することが目的だ。

ある程度考えをまとめたところで、点数が表示される。

『Bクラス 田中太一
英語 165点

&

Bクラス 平林拓人
英語 173点

VS

Aクラス 七伏行平
英語 452点

&

Fクラス 七伏博人
英語 448点』

開始と同時に走り出し、相手が動くまえに胴を真っ二つにして、おまけで四肢と頭を切り落とす。

これで一体目撃破。

すかさず二体目の背後に回り、羽交い締めにする。
いきなり倒すのも面白くないので、行平の訓練をする。

「右手」

僕がそう言うのと、相手の召喚獣の右手が行平のボウガンによって撃たれた。
少し中心からずれているが、召喚獣でこの精度なのはすごいことだろう。

「左手」

今度は左手の中心に風穴ができる。
というか召喚獣を使ってこの銃弾を弾いたことのある僕って結構人外なんじゃ……………

「両足」

続けざまに二発の銃弾が放たれ、2つの風穴があく。
相手の召喚獣の上に放り投げ、次の被弾場所を指定する。

「両手両足の付け根」

またも寸分違わず命中する。
行平のボウガンの一度に装填できる弾は8発なので、次の弾の装填をしていた。

「額」

最後の一撃が召喚獣の頭を貫き、勝負が決まった。

「勝者、七伏兄弟」

「いやあ、それにしても楽しかったね」

「Bクラス相手に無傷で勝てる方がおかしいんですよ」

まあいいや。僕がおかしいのは元からだし。

それよりもクラスの喫茶店がどうなっているかが気になる。

「それでは私は教室に戻らねばなりませんので」

「うん。次もしっかり暴れよう」

行平と別れて教室に行くと、中から大きな声が聞こえてきた。

『こんなモン食えるわけないだろ!』

『まずいしな!』

なるほど、営業妨害か。

「責任者はいないのか! このクラスの代表ゴペツ!」

「代表は今はいませんので、私が代わりとさせていただきます。何かご不満な点でもございましたか?」

ホテルのウェイターのように恭しく頭を下げる。口調は行平の真似をすれば良い。

「不満も何も、今連れが足払いされたんだが……」

そんな些細なことは気にするまでもない。

「それは私の『足払いから始まる交渉術』に対する冒瀆ですか？」

「ふ、ふざけんなよこの野郎……！何が交渉術ふぎゃあっ！」

ガスッ！

「そして『鳩尾強打でつなぐ交渉術』です。最後には『鳩尾強打（強化版）で締める交渉術』が待っていますので」

「わ、わかった！こちらはこの夏川を交渉に出そう！俺は何もしないから交渉は不要だぞ！」

「ちょ、ちょっと待てや常村！お前、俺を売ろうと言うのか！？」

夏川の髪型は坊主。常村の髪型はモヒカン。
記憶完了だ。

「それで、交渉はまだ続行しますか？」

「い、いや、もう充分だ。退散させてもらう」

賢明な判断だけどーー

「そうですか。それではーーー」

手遅れだ。

「おいっ！俺もう何もしてないよな！？どうしてそんなげぶるあつ
！」

「ーーこれにて交渉は終了です」

膝で思いつきり鳩尾を強打。短時間で二度食らったわけだから痛いだろうな。

「お、覚えてろよっ！」

倒れた夏川を抱えて走り去っていく常村。ありきたりな捨て台詞で覚える気にもならない。

客に少なからず迷惑がかかったので、謝罪と商品を半額にして提供することで場を治めた。

第二十三問（後書き）

あとがき

感想、ご意見等ありましたら、お願いします。
お気に入り登録や評価もよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1495ba/>

バカと速攻と昆虫少年

2012年1月4日04時48分発行